

ひとしづくの森

秋の号

発行・編集

山形県源流の森

飯豊町須郷 669-3

～開設25周年記念～ 森林の創業感謝祭を開催

九月二五日は源流の森開設二五周年を記念して「森林の創業感謝祭」を開催しました。夏を思わせる晴天の中、千人を超える親子等の体験者で大盛況でした。

この催しは例年開催している「森林の文化祭」を拡充し、開設以来ご支援頂いた関係者の皆様に敬意を表するとともに、ご利用頂いた県民の皆様へ感謝を伝えたいと開催したものです。

来賓の置賜総合支庁大築森林整備課長の祝辞に



ミツバチの巣からロウソクづくり

続き、アルプホルンのファンファーレを受けて安達館長が開会を宣言、楽しい一日が始まりました。

式典では館長から源流の森インタープリターション協会を初め運営に協力いただいている四団体に感謝状を贈呈しました。

常設プログラムでは、無料体験や特別体験に参加者が殺到。冒険や陶芸、クラフトも昼休み無しの大車輪でお客様に対応しました。

また特別プログラムでは、西置賜ふるさと森林組合の協力を得た「働く林業機械体験」にも行列が。東京オリンピック・パラリンピックの選手村の木材を使った「積み木大会」では親子が激戦。大人の背丈より高く積んだ組もあり

十月一・二日は第一一七回森林の学校を開催しました。子供達や親子二四人が参加して森を巡って森や生き物の姿を観察し、様々な森の恵みを探して暮らしに役立てる技を学びました。

インタープリタから説明を受けたり、クリやドングリ、きのこを集めながら森を進みました。そして木の洞に巣をかけたニホンミツバチを間近で観察。その一生懸命な姿に見入っていました。その一ロジに戻ってからは拾ったドング

第一一七回 森林の学校

リでコマを作り、回して競争しました。お昼のお弁当の後は、シイタケの菌打ちを体験。来年キノコが出ることを願ってホダ木にコマを打ち込みました。そして、午前中に見た貴重なミツバチの巣を溶かして自分だけのロウソクを作りました。少しでもたくししようとみんな真剣です。参加者からは、自然の中での親子の触れ合いや、丁寧で専門的な説明に感謝の言葉がありました。次回は、令和五年二月雪の中で皆さんをお待ちしています。



特等 温泉宿泊券をゲットだぜ！

りました。森のホームステイやクロモジの匂い袋づくりも盛況。昼には中津川の昔話やオカリナコンサートも。中でも大抽選会は参加者が温泉宿泊券や米沢牛目当てに会場一杯に詰めかけ、館長の引き当てる番号に歓声とため息が混じって一喜一憂でした。第七波以来久しぶりの大入り満員と、みんなの笑顔が弾けた一日でした。

森林の収穫祭11・6

十一月六日は、親子十二名の参加をいただき本年最後のイベント「森林の収穫祭」を開催しました。

前日までの予報が外れ、暖かな日差しに恵まれた当日は、二班に分かれた参加者が森へと出発していきました。今季最後の紅葉が輝く中、インタープリタから森の不思議を聞いて興味津々。途中、落ち葉やドングリを拾いました。道々、溜まった落ち葉を踏みしめながら深い森の匂いに包まれ、中津川の秋を満喫しました。その後、野外シェルターに移動して拾ってきたドングリでコマを作っては回して競争です。

お昼は穏やかな日差しの中、親子でお弁当を開いていると、奥山会長が吹くアルプホルンの音が園内の木立を抜けて流れ、みんなを和ませてくださいました。

さて、午後は最初に花炭づくりを行いました。半信半疑で木の実や葉



紅葉の森を散策する参加者

を缶に入れた参加者は、ついでお芋と栗も炭火に投入。焼きあがるまで拾った落ち葉でエコバックづくりとキノコの植菌を行いました。思い思いのエコバックが出来た頃、花炭も焼きあがりしました。蓋を開けてびっくり、元の形のままの炭です。焼き芋も蜜がまわります。焼き栗もホクホク。参加者はお土産一杯で大満足の日でした。物産市のナメコも完売。「毎週こうだといのに」とぼやく所長。協力頂いたみなさんありがとうございました。

所長イッシーのネホダレ

源流の森の展示室には防犯カメラが付いているモニターが事務室にあります。展示室の電源を落とすと暗転するので、そこに白い手が現れ「おいでおいで」をするのです！慌てて展示室に行きましたが何もありません。すぐ消えてはまた時々現れます。何かいるのかな？

源流の森の冒険の森には昔、飯綱山法栄寺というお寺がありました。そこには狐火が出たり、狐憑きになった人を治す巻物があったそうです。中津川の昔話にもなったその巻物は、ダム工事寺が解体されるときに再発見され、井上元一氏が「白川ダム物語」の中で書き残しています。それによると中身は槍術の型を描いた免許状で、飯篠長威斎から塚原ト伝、藤原種次に伝えられたと書かれました。飯綱山の本山は長野県戸隠、忍者の里です。法栄寺の住職が本山で修行したとすれば武術の訓練を受けていても不思議はないことでした。

知れば知るほど興味深い中津川の物語を、ぜひ多くの人にも知ってほしいと思っています。
(ネホダレは方言で寝言のこと)